

# 平成16年度病害虫発生予察特殊報第2号

平成17年2月17日

埼玉県病害虫防除所

TYLCV (*Tomato yellow leaf curl virus*) によるトマト黄化葉巻病の発生について

## 1 発生経過

平成17年1月下旬、川越地域で栽培されている促成トマトにおいて、上位の新葉が葉縁から黄化し、萎縮及び葉巻症状を呈している株が確認された。埼玉県農林総合研究センターでPCR法による検定を行ったところ、2月7日に県内では未確認のTYLCVが検出され、トマト黄化葉巻病と判明した。

本病は、1996年に静岡県、愛知県及び長崎県のトマトにおいて初めて発生が確認された。その後、ミニトマト、トルコギキョウでの発生を含め、現在まで16県で確認されている。

## 2 病徴及び病原の諸性質

### (1) 病徴

トマトでの病徴は、最初頂葉が黄化して葉巻症状を呈し、その後、症状が進むと葉脈間も黄化し縮葉する。さらに病勢が進むと頂葉が叢生し、茎部の節間が短くなり株全体が黄化萎縮する。特に生育初期に感染すると激しく発病する。

また、発病前に着果した果実は正常に発育するが、発病後は開花しないか、開花しても不稔となることが多い。

### (2) 病原の諸性質と伝染経路

ア TYLCVはシルバーリーフコナジラミ (*Bemisia argentifolii* Bellows & Perring) によって媒介される。

イ シルバーリーフコナジラミは、成虫、幼虫のいずれも感染植物を吸汁することによって、ウイルスを体内に取り込み、約1日の潜伏期間を経て、長期間ウイルスを伝搬する。トマトの感染から発病までの期間は約10日間である。

ウ 汁液(接触)伝染、種子伝染、土壌伝染及びオンシツコナジラミによる伝搬は、現在のところ確認されていない。

エ 感染する可能性のある植物(感染事例が報告されているもの)

ナス科：トマト(ミニトマトを含む)、チョウセンアサガオ、ペチュニア、  
オオセンナリ、イヌホウズキ等

キク科：タカサブロウ、ノボロギク、ノグシ、ヒャクニチソウ

マメ科：インゲン、ヒラマメ

アオイ科：ウサギアオイ

リンドウ科：トルコギキョウ

トウダイグサ科：エノキグサ、ショウジョウソウ

ナデシコ科：ウシハコベ

### 3 防除対策

- (1) 育苗期から定期的に薬剤散布を行い、定植時の粒剤の施用や、生育期に薬剤散布を行う等して、シルバーリーフコナジラミの防除を徹底する。
- (2) 施設内にシルバーリーフコナジラミの発生源となる不要な植物を持ち込まない。また、ほ場周辺の除草を徹底し、感染のおそれのある植物を植栽しない。
- (3) 施設の開口部に寒冷紗や防虫網（1mm目以下）を張り、シルバーリーフコナジラミの侵入を防ぐ。
- (4) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、抜き取り速やかに施設外に持ち出し、焼却するか、土中に深く埋め、施設外に絶対放置しない。
- (5) 収穫終了後は、直ちに地際から切断または抜根したうえで、施設を10日間以上密閉する等して、シルバーリーフコナジラミを死滅させる。

〈トマトにおけるシルバーリーフコナジラミ防除薬剤例〉

薬 剤 名	使用時期	使用回数	希釈倍数・使用量	10a当たり散布液量
ダントツ粒剤	鉢上時 定植時	} 1回	1g/株	—
ジノテフラン粒剤	育苗期 定植時	} 1回	1g/株	—
モスピラン水溶剤 <sup>劇</sup>	収穫前日まで	2回	2,000倍	150～300 <sup>㍓</sup>
アドマイヤー顆粒水和剤 <sup>劇</sup>	収穫前日まで	2回	5,000～10,000倍	100～300 <sup>㍓</sup>
コロマイト乳剤	収穫前日まで	2回	1,500倍	150～300 <sup>㍓</sup>
ダントツ水溶剤	収穫前日まで	3回	2,000～4,000倍	150～300 <sup>㍓</sup>
ラノータープ	栽培期間中	1回	10～50 <sup>m</sup> ²/10a設置	—

農薬は必ずラベル表示を確認して使用すること。



発病初期（黄化巻症状）



萎縮症状(右健全株)



シルバーリーフコナジラミ